

が配られ、増歩がついた。当時の債銀は、一日男三十銭、女十五銭、増歩はこれに割増しされたのであった。石工は腕利きの仲谷幸吉さんで、東上浦（現上浦町）の浪木から来ていたが、其の仕事振りは今日まで語り伝えられている。工事は同じ上浦の曾根幸吉組の二十名程の土工が、主力となつて働いてた。

經費がかさみ、工事が長引いてくると、さすがに倦怠色が目立ってくる頃、「この小部落と見殺しにするな」の声が、佐伯の全威に澎湃として起り、下切畑・直見・上野・中野・明治・川原木・鶴岡、遠くは周尾・青山の村々から土、弁当持彦で五十人、八十人と、土煙を上げながら強んと毎日のように加勢が押し寄せた。隣人の温かい気持は決して忘れてはならない語り草である。

この加勢は、地元民の奮起は目ざましく、作業はにかかれば活気づいて、さすがの工事も終りを迎え、明治四十四年六月六日、溜池、水路とも同時に完工に至った。名づけて『戊申溜池』と呼んだ。

溜池築造費は、二万八千六百五十八円、井路開鑿費に四百七十一円と費したと、当時の記録は語っている。

其の後、昭和七年十一月溜池内面掘取工事と幹線水路の工事を行い、更に昭和八年、九年の二か年の継続事業として、水路二千六百七十四間の延長工事を行い、その八割はコンクリート張りを実施したものである。

戊申溜池工事の状況については、尾岩の安達忠弘氏宛に保存されている、決潰後の工事絵図が遺されているばかりでなく、安達村長と共に工事の推進に当たった近藤吉五郎氏が、「戊申溜池由来」を大正四年に、新修詩調に載っているのが現在残っている。

この地及最大の事業であった溜池工事は、戊申の年明治四十二年に始められて、三年の歳月を経て完成したが、何よりも先づ計画推進に積極的に取り組んだ先人の功績を讃えたい。戊申溜池こそ、限りない恩恵をこの地及に遺してくれたものと謂われはならない。（終）

記録

わがふるさと、元田誌、

— 学校の歴史と大災也伝染病 —

会員 市野瀬 仁

大間小学校百年の歴史の概況

「明治七年十月一日、元田に大間小学校が創立してから、既に百年の歳月が流れました。十年一昔と云いますから、此の間、宮の下に移転して再び元田、そして現在地へと幾度も変遷もありました。

初代小幡校長より、二十九代現在の宮原校長に至る二百数十名の教師を迎え、同窓生も三千四百有余名に及んでいます。荒廢した校舎とはいえ、永い百年の風雪に耐え、有為の人材を多く社会におくり出し、現在、教師・児童・園児、百数十名、僅かの期間、彼々として教育を続けておられます。

同じ運命にある兄弟校と、永年待ちわびた統合、合併が、奇しくもこの百周年と期して成立に至った事は、

誠に感慨無量であり、よろこびにたえませぬ。――

これは、「大間校創立百周年にあつて」と題して述べた、記念事業推進委員長の大田一二氏の挨拶の前段である。同窓会は各種の行事を持ってこれを祝った。

その中、西青寺の住職岩崎裕康氏が編集委員長に当り、三千四百余名の同窓会名簿の作成を担当した。

一方学校側は、二つの記録を残している。一つは「創立百年の歩み」のタイトルで、百年間の年表、学事関係（村長はじめ教育委員・教育長の氏名と期間）、歴代校長及び在職教職員の仕事・氏名・期間の記録である。いま一つは、「めばえ」と題しての児童の記念文集である。その中から六年生の児童の作文を紹介しよう。

百年の歴史と私たち 六年 深 矢 照 美

私たちの学校は、明治七年の十月一日に、開校しました。もちろん、百年間を今の学校でとおしたのではありません。はじめは宮の下付近にあつたそうです。

その当時は、新しい文化がとり入れられ、世の中は大へんかわつたそうです。四年制の義務教育の小学校が、その新しいものの一つです。そんなとき、はじめたこの大間小学校が出きたそうです。

大間小学校は、三、四回ぐらい学校の位置が変つて今の場所へきたそうです。そうすると二十年から二十五年に一回ぐらい学校が変わつたことになりました。私たちはよくはしりませんが、分校もあつたそうです。

私立学校が開校して、九十四年目に小学校へ入学しました。昭和四十四年のことです。それから六年たった今、私たちは百年目の卒業生となり、また、大間小学校最後の卒業生となりました。

小学校の方で、新学期からは新しい明治小学校に女

ります。それは、近くの床本小学校と合併するからです。近くの床本小学校も同じ百年の歴史をもつ学校です。大間小学校とくらべて少し早く開校したそうです。そうして、昨年大間小学校と同じように、百年の式典が行なわれました。

私たちは最後の卒業生として、普通の卒業生よりも多くの仕事があります。こればかりは、なろうと思つてもぐう然なもので、やはりむりなところもあります。私たちは、そのぐう然に出会い、百年目の卒業生として、大間小学校最後の卒業生として、自分の卒業生には味おえないものが味おえました。

そして、その長い百年史、泣いても、笑つても帰つて来ない大切なものだと思ひます。

大間小学校は名前の如く、大字大坂本と大字尺間の文字を一字ずつとり名づけられたものであり、学校の位置も両者のほぼ中間点に近い元田を遡んだのである。前述の記録でも分るように、百年の間には何回かの曲折があつた。その時、その時の事情があつた。

とくに、明治七年（明治五年学制施行）の創立の年、明治二十年の敷設の年、昭和四十九年の年代を右の年表からみると、大間小学校の变化は、そのまゝ日本歴史の变化の時期でもあつた。

昭和五十二年、現在、大間小学校の跡地は、第二川澄化学工業が建設中であり、小学校は床本地区と大間地区が統合し、旧明治村の名残をそのまま復活して、植松に明治小学校として誕生したのである。こうしてみると、元田は百年の間、小なりとも文教の地であつたということがいえる。

(年表)

大間小学校の変遷 (一部)

<p>本校創立、元田空原の神宮定空の付道の民家生 使用した。同日大間分校創立、位置は兩 の下の民家、両者とも尋常四年までであった。 校地は大坂本字宮ノ下(今森林組合のある所) 宇藤水分教場創立 宇藤水分教場を除き、すべて元田(今公民館の空地) に移転して新校舎の落成を見た 元田に上地一歩を買収埋立て新校地と完成した。 沖繩より集団疎開児童約四〇名収容 新校舎落成 新村名変更により弥生町立大間小学校と改称 宇藤水分教場廃校 学校創立百周年の式典を挙行 大間赤痢赤痢小學校統合 明治小學校分校につき、大 間小學校廢校</p>	<p>七・一〇・一 三二・四・五 四〇・六・二 四四・八 一三・八・七 一九・九・二四 二〇・七・三〇 三二・四・一 四一・三・二九 四九・一〇・一 五〇・三・三一</p>
--	--

いろいろな災害

火災について

火災について明らかかなものは、昭和七年から現在まで
三回を数える。その時の実情をみよう。

昭和七年五月七日午前八時頃、竹ノ原の大石正夫宅よ
り出火。下隣りの松本哲夫宅に類焼して、二軒共全焼し
た。場所から水の不便な所にもかかわらず、上隣に当る
川野左喜光宅は、部落民の必死の防火活動により、かる

うじて類焼をまぬがれた。

昭和十四年七月十六日午後、兒玉義孝宅より出火、部
落民総出で消火につとめた。前に流れている井路からバ
ケツリレーで水を運び、懸命の働きで屋根の上の火焼い
て火はおさまり、隣家への延焼はまぬがれた。

次は昭和三十四年の、いつであったか、時刻は午前十
一時頃、市野瀬宗愛宅から出火して全焼した。わがが一
メートル位しか離れていない市野瀬善之宅の納屋には、何度
か燃え移ろうとしたが、^{火災}懸命の働きで防ぎ止めるこ
とができた。この時一〇〇メートルばかりはなれた、天神屋
敷に建っている市野瀬藤喜の杉皮葺の推葺乾燥小屋に飛
火してこれを全焼させ、上の山まで燃え上ったが、大事
には至らなかつた。

この火災により、江戸中期以降庄屋とつとめた市野瀬
家は、遂に姿を消した。今、市野瀬善之宅の前にある雜
草の生えた空地が、その屋敷跡である。

以上三件の火災を見るのに、いずれも近接した家屋が
あるのに、友いした類焼のなかつたのも、部落民の機敏
な消火活動のおかげであった。加えて、昔から広瀬に祭
る火代せの神様のおかげで、村人日口々に言
っている。人間や、目に見える自然の力より外に、見え
ない、分らない神秘なものに、「おかげ様で」という思
いをいふすものがあるのである。

伝 染 病

赤痢患者の発生

昭和七年頃、元田から赤痢が発生し、二人の死亡者を

みた。當時は、保健所がなく、大庭医師と警察の保健課の指示により、早急に避病院が作られた。場所は元田前川の祇石の河原であった。村では、忽ち四五人の患者がでて収容されたが、その避病院からは死者は出なかった。最初には亡くなった二人は、上野村の親戚の家で葬儀に行つて、帰つてから発症したという。益田医師に問い合わせたが、当時、上野村には赤痢患者はいなかったらしい。

弥生町教育委員会に勤めている五十川氏に、切畑方面の話しを聞くと、この頃須平に患者があり、一人の死者が出てゐる。また昭和二十七年頃、深田・久土地区に赤痢が相当数発生した。それ以前切畑では、明治初年に須平からコレラが発生したことがあったそうで、以来須平は避病院が建つてゐるのも、そういう歴史を物語つてゐる。

大間地区の古老の話では、元田に赤痢患者が発生し、避病院ができたことと記憶があるが、明治時代から、コレラやその他の伝染病が発生したことなど聞いたこともないという。

以前は、伝染病も散發的にあつては、広い範囲に知られず消滅したもののようである。

肺結核の流行

村人の話によると、昭和十二年頃から昭和十五年にかけて、結核病患者が非常に多く、元田の誰々が死亡したと、十指にちかい数をあげることができるといふ。その言え代子供が頃、元田の前を通るときは、鼻をつまんで通れということを聞いたことすらあつた。

そして、おれは遺伝病であるとか、贅痰病であるとか、おれの病気がかかると、左にいって死亡するものだといわれ

ていた。左しかば元田部落に多かつたので、上野・切畑地区の識者に話してみると、いよいよどこも同じで、病気がかかつて生き残つたのは、おれだけだよという返事がかえつてきた。

その病原は、大分の片倉製糸工場と延岡のベンベルグ工場などに行つてゐた女工さん達が、悪くなつて帰つて来て扱まつたなどという風評も聞かれた。当時不景気の連続に日本のおかれた悪条件が、このような伝染病の流行を促進させたことも事実である。

このことについて、佐伯の保健所長を長く勤められた土屋六衛先生に尋ねて見た。先生は次のようにいわれた。肺結核病が、昭和十二年頃から昭和十五年にかけて多かつたということも言えない。この病気がつと以前からあつて、国民病とまでいわれたものである。この度の戦争中、大陸の第一線から一個師団七かゝり結核患者が帰還する状態を知つたソ連は、日本は結核病で戦争に負けるとまで言つてゐたという。

このように、結核病亡國論も出かぬない状態であつたので、戦後の昭和二十六年、結核予防法を制定し、行政上の措置をとることとなつた。以来三十年後の今日、その減少率は世界第一の効果を記録してゐる。以前六千万人の人口の中、三十万人の死亡があつたものが、現在は一億人中二万人以下への死亡数に減少してゐるという。それでも伝染病としては一位となつており、昔とちがつて体力のない老人・子供に見られるのが現在の特徴である。なお、日本の結核患者率が減少したといつても、オランダ・アメリカの五倍ないし六倍の患者がいることを知れば、まだまだ多くの問題が残つてゐることが分るのである。その上大分県は日本でその患者数が第一、二位の汚名をもつてゐるのである。

元田を襲った結核病は、什って昭和十二年頃だけでもなければ、元田だけのものでもなく、日本全体を風靡したものであったことがわかった。
 とおあれば、その伝染力はインフルエンザの如く、その死亡率と恐怖は現在のガンに劣らなかつたので、結核病に対する記憶は、いつまでも消えないのである。

伝染病だけでなく、この「元田誌」は、明治時代の初期以前、即ち江戸時代からずつとさかのぼつて、記録・資料などない中で、ごく限られた年と場所の記録であることを、十分承知しておきたい。これは、也を得不いことであり、残念なことでもある。その上真実性に乏しい聞きこみの方が多い故、非科学的な点もあり、一冊の書物としての価値も整いことを承知しておかぬばならない。しかしこの点だけで責めただけで、広い立場から真実を迫つていく資料を求めて記録し、後世に残していかねばならぬと思ふ。

参考までに「大分の医療史年表」をかりて、伝染病流行の歴史を知り、私達「元田誌」編さんの反省材料に役立てよう。

(付)
 大分の医療史年表

文政 五(一八三三)	コレラ日本に上陸す
安政 五(一八五八)	コレラ全国的に大流行 豊前豊後で数千名死亡。別府医師天田淳コレラ治療に活躍
明治一(一八六八)	全国的にコレラ大流行 県下で四月に南海部郡 霞ヶ浦に第二号発生 患者合計五、二七四人 うち死亡二、九七三人
明治二五(一八九〇)	天然痘流行 県下患者二、六四一人、うち死亡

明治二六(一八九三)	三、一八七人 赤痢 再び大流行 県下の患者一〇、三九三人 うち死亡二、五〇五人
昭和二〇(一九四五)	赤痢流行 県下の患者二、五八八人 死者六九三人
昭和二一(一九四六)	天然痘発生、臼井にコレラ発生 患者七人 うち死亡一人
昭和二三(一九四八)	日本脳炎大流行 県下患者二〇四人 うち死亡七二人
昭和三六(一九六一)	小児マヒ大流行 県下患者一五四人 うち死亡一人

随想

思い出の食べ物 (その二)
 — おふくろの味・佐伯の味 —

鎌倉市台居住
 会員 神野 幸 人
 上南新富戸出身
 (佐伯中学三十三回生)

はじめに
 「親爺の歴史」の中の、食べ物項です。おなを左達(共、娘さんときす)二人お大人になつて、思い出す食べ物があるが、いくつあるか。
 九州の片田舎の貧乏時代、物心づいたときかの戦争時代、軍隊時代、そして敗戦、食糧難、配給、外食者、遅配、欠配、買出し、生法等の言葉も知らない今の若い人達には、想像出来ない食べ物もあるでしょう。(注は編者子、以下同じ)
 小生の思い出す食べ物、それはテレビでもやる料理のことではない。何でござるか、は、読んで自分(注編者子)で判断して下さい。